

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

連携

～淡海のほとりを洪水から守る～



台風 18 号の接近に伴い、数十年に一度の大雨となるおそれ大きいときに発表される大雨特別警報が滋賀県内に初めて発令され、県内外各地に甚大な災害をもたらしました。

琵琶湖でも豪雨による急激な水位上昇があり、湖沿岸の低い土地の浸水を防ぐため、琵琶湖開発施設である排水機場を 18 年ぶりに 14 箇所すべて運転し洪水対応にあたりました。今回はその対応にあたった一人、湖北管理所の田村所長に琵琶湖開発総合管理所を代表して話を伺いました。



日本最大の湖「琵琶湖」
日本最大の湖面積を誇る琵琶湖。琵琶湖開発総合管理所では、琵琶湖開発事業で整備された施設の操作や維持・修繕などの業務を行い、琵琶湖周辺の治水と淀川下流への安定した水道用水・工業用水の供給を行っている。

Profile

琵琶湖開発総合管理所 湖北管理所 所長

田村 和則 Kazunori Tamura

昭和60年4月水資源開発公団(現水資源機構)入社。土木系技術者として阿木川ダム、浦山ダムで建設業務、中部支社、長良川河口堰で管理業務に携わる。出向先の(財)水資源協会、試験研究所(現 総合技術センター)では企画調整業務等を経験。その後、木津川ダム総合管理所布目ダム管理所所長を歴任し、平成25年4月より現職。

台風 18 号の防災対応

台風 18 号の接近に伴う降雨によって、琵琶湖流域では 9 月 15 日から 16 日の 2 日間にかけて総雨量 278mm (琵琶湖流域平均)を記録、琵琶湖の水位上昇量は 102cm にもなり、平成 4 年 4 月の琵琶湖開発施設の管理開始以来、最大の上昇幅を記録しました。

15 日午後 6 時過ぎ、大雨による出水により、大同川水門の操作が必要と判断し、所長・管理課・機械課へ状況を報告し、ゲート操作を実施しました。その後、豪雨により道路の一部冠水している状況のなか湖北管理所(米原市中多良)に到着、管理施設などの状況調査や関係機関との情報共有を始めました。

16 日午前 2 時 30 分、琵琶湖水位の急激な上昇に対して湖北管理所では管轄する 5 箇所の排水機場で内水排除する態勢に移行することとなり、防災本部である総合管理所(大津市堅田)との連携を図りながら、関係自治体や地元関係者との連絡・調整を行うとともに、各施設に設置され自動送信されてくる水位の値と、電話で得られる現地職員からの情報すべてを確認し、水門・樋門の操作やポンプ運転の指示を行いました。

総合管理所全体では、急激な水位上昇のあるなか 14 箇所すべての排水機場のポンプを運転し、69 箇所の水



①低標高農地・水路の調査 ②全開した大同川水門 ③全開した今江川樋門 ④水門操作の様子 ⑤大同川排水機場のポンプ ⑥来向川樋門操作状況

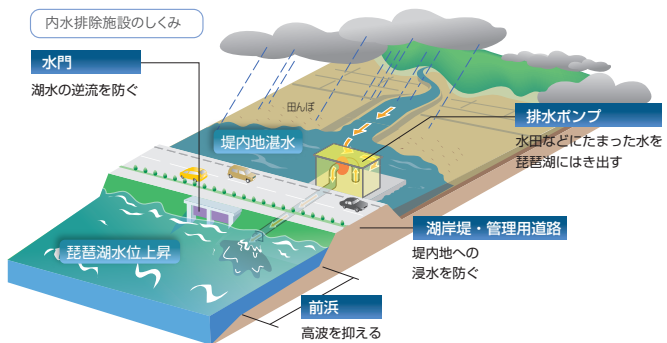
門・樋門を閉じるなど、琵琶湖沿岸の低い土地の浸水被害を軽減させました。

防災対応は9月16日から9日間にもおよび、24日午後1時30分までにすべての排水機場の運転を停止、一時的に閉鎖していた水門なども全開し、防災体制は解除となりました。

琵琶湖の「内水排除」とは

大雨によって琵琶湖の水位が上昇した場合、湖岸堤と水門・樋門により琵琶湖から流入河川への逆流を防止する操作を実施します。しかし、堤防を隔てた内陸側では、行き場がなくなった水が低い土地に溜まるため、その水をポンプで琵琶湖側へ汲み出します。この操作を「内水排除」といい、水に浸かっている時間を短縮し、被害を軽減させる効果があります。今回のようにすべての排水機場のポンプを稼働させたのは、平成7年以来18年ぶり、管理開始以来2回目のことでした。

前回の内水排除（平成23年5月）対応経験者が少ないなかではありましたが、各職員が常日頃から防災の意識をもって業務を行っていること、また、沿岸の市や土地改良区などの協力もいただき、総合管理所をあげての内水排除は適確に対応することができました。



的確な防災対応を行うために

内水排除操作のタイミングや要領は、排水機場ごとに異なるため、それぞれのポンプ（14箇所）、水門・樋門等（137箇所）のすべてを遠隔操作ではなく直接職員が現地確認し、水の流れや土地の状況などを把握しながら

現地で操作します。そのためには総合管理所全員による防災体制の班を編成し、連携を図りながら対応する必要があります。

内水排除施設の操作は、過去の実績では約3年に1回程度の低頻度です。そのため、定期異動もあり全職員対象に毎年4月にポンプ運転訓練、5月には洪水を想定した演習を実施し、非常時に備えています。また、日々変化する琵琶湖の状況把握、湖岸堤やその周辺に異常がないかの巡視、水門や排水機場などの施設が非常時の操作に支障なく確実に運転ができるよう定期点検を行っていることも緊急時に対応するための重要な要素になっています。

加えて、「内水排除」について、沿岸の管理区域ごとに地元住民へ説明会を毎年実施します。そのための資料を作成し説明することは、職員自らの業務に対する理解を深める効果もあり、今回の防災時においても慌てることなく対応することができました。

防災対応を振り返って

今回の防災対応で感じたことは、情報の入手・共有・発信、それら全体を統合した意見交換を防災本部と管理所と関係機関において、刹那的なスピード感を持って実施することが極めて重要であるということ、また、地域住民の方々に琵琶湖開発施設の機能と役割、管理所における防災対応について、さらに深く理解していただくことが災害を軽減させるうえで重要だと実感しました。

今後も水機構の職務として24時間、治水・利水などに対応できる体制・意識を整え、ベターからベストを目指して日々努力していきます。

何事にもストイックな田村さん、趣味も多彩で、中でも「CG作成」は業務にも活用しているとのこと！
最後に一言。「水機構職員は、全力で皆さんの生活を守るための一助となるよう頑張っています。これからもこれまで以上のスピード感を持って業務に邁進して参ります。」と力強く答えてくれました。



台風18号の防災対応詳細は琵琶湖開発総合管理所HPに掲載しております。